

成果報告書

記入日 2020 年 2 月 27 日

氏名 廣谷妃夏	渡航先国名 中華人民共和国	所属機関 清華大学美術学院芸術史論系
研究テーマ： 6-8 世紀東部ユーラシアにおける染織品の交易—「蜀江錦」の生産と受容をめぐって—		
研究期間： 2019 年 2 月～ 2020 年 1 月		
<p>研究成果（概要）</p> <p>中国各地の博物館及び寺社に所蔵されている古代染織品を観察したうえ、中国における「蜀錦」の生産及び実体と、現在の受容について、織技術と文様、近年の考古学的成果及び古典籍の記述をもとに考察した。これによって現在日本で受容されている三種「蜀江錦」の年代観と流通を再検討した。</p>		
<p>研究成果（詳細）</p> <p>本研究は、主に法隆寺宝物の染織品の一部である赤色の三種の錦、所謂「蜀江錦」について、その実体を言説と工芸史的側面の双方から検討するものである。「蜀江錦」は日本での名称であり、中国では「蜀錦」と称される。「蜀江錦」は、法隆寺に聖徳太子ゆかりの品として仏幡や帯など様々な形態で残っているほか、各地に所蔵される裂帳にも収められており、たとえ数センチの小さな断片であっても貴重な品として伝世してきたことが窺える。こうした珍重ぶりに関しては、聖徳太子への信仰、衣服令における「赤い錦」の優位性、のちの茶文化等における古代裂の愛好などの観点が指摘でき、「蜀江錦」は外来の高級染織品に対する日本の初期の文化的受容を検討する上でも興味深いモデルである。</p> <p>今回の留学では、「蜀江錦」と呼ばれる錦が、中国の「蜀錦」の範囲においていかなる位置にあるのかを解き明かすことを特に重視した。《赤地亀甲繫花葉文錦》《赤地獅子鳳凰連珠文錦》《赤地格子連珠文錦》三種の織組織と文様について、出土染織品等との比較検討を行い、その結果、従来 7 世紀後半の制作とされている年代観が 6 世紀代に遡りうる余地があるとみなした。その上で、「東部ユーラシア」における高級染織品の交流の様相について検討し、日中双方の先行研究において指摘されている、中国（唐）から日本への一方向的な流通ルートを再考した。中国東部、朝鮮半島、日本列島では中国西北部の乾燥地帯に比べ出土染織品が少なく、ルートの確定は難しいものの、「蜀江錦」の流通においては、中国南北朝の各王朝、朝鮮半島の三国（新羅、百済、高句麗）、日本（倭国）、タリム盆地の西域諸国、吐谷渾、柔然、エフタルなどの多層的な国際関係と、外交儀礼における高級染織品の役割を考慮する必要があるといえる。</p> <p>【研究方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 中国と日本の古文献の記述、及び中国の現在の研究動向、学説の整理 ・ 中国各地の博物館に所蔵されている染織品・織機を実見し観察する 		

1、名称の問題

「蜀江錦」はあくまで後来の日本での名称である。現在は主に法隆寺・東京国立博物館所蔵の当該錦に当てているが、日本の文献に見える「蜀江錦」の語義としては「渡来の貴重な赤地錦」といったものであると考えられる。『平家物語』『吾妻鏡』などの権力者の富の象徴としての描写にも見える語だが、8世紀ごろの編纂とみられる『秘府略』の錦の条には「蜀錦」の語はあるが「蜀江錦」は認められない。『秘府略』は当時日本に伝来した漢籍から錦に関わる故事を抜き出して編集した辞典の一種であり、「蜀錦」に加えて「蜀江錦」の語が使われるようになったのは、後来の日本においてであることが改めて示唆される。

「蜀錦」は、時代や様式を問わず現在の中国・四川省で生産されたとおぼしき錦を指す名称である。現在の中国の諸研究では、戦国時代から唐代に至るまで、中国内地及び周辺地域出土錦について、多くが「蜀錦」に比定されている。当時の錦の実際の生産地に関しては考古学・文献史学の観点からいくつか説があるものの、この日中間の用語のずれを整理できたことは成果の一つである。

2、織技術と文様

「蜀江錦」は「複様平組織経錦」という中国の古代錦に典型的な織組織を持ちながら、文様には連珠円文など外来の意匠の影響が認められる。これらの点は、中国南北朝期に生産されたとみられる錦に共通する。ひいては東アジアの錦が複様平組織経錦から複様綾組織緯錦に全般的に移行した織技術の変革期の特徴を示している。今回の留学を通し、織技術、特に経錦を制作する織機の検討、そして漢晋代から隋唐代の染織文様について、体系的に検討した。

《赤地亀甲繫花葉文錦》《赤地獅子鳳凰連珠文錦》《赤地格子連珠文錦》については、以上に加え、仏教石窟などにみられる文様も加味して検討し、少なくとも6世紀後半に制作時期を遡る可能性を示した。また今回、タリム盆地出土の南北朝時代から隋唐代の錦の獅子文を概観したところ、《対獅対象文錦》(558年以前)は南朝の墳墓壁画にみる獅子(5世紀末-6世紀初)と、《赤地獅子鳳凰連珠文錦》及び類例は北朝の仏教石窟における獅子像の変遷(6世紀)と相似することがわかった。近年中国国内の研究において、南北朝期の錦は「北朝」の中心地にあたる別地方の生産なのか、従来の説通り南朝(梁)との関係が深い四川地域産なのか、という論点がある。しかし、そもそも四川地域の支配勢力は、553年を境に南朝(梁)から北朝(西魏)に移行しており、加えて元来は、四川地域は中原地域に加えて雲南地方やタリム盆地に繋がる独自のルートを保持していた。獅子文を始めとする各文様には四川地域の文化の重層性が反映していると思われ、四川地域での生産を積極的に否定する理由にはならないと考える。

3、博物館所蔵品の観察

報告者は北京を拠点としつつ、各地の古代染織品の所蔵館、特別展示に足を伸ばしそれぞれの記録撮影を行った。今回は滞在研究という形で正規学生ではなかったこともあり、閲覧申請を行い、より精確なデータをとることは叶わなかったのが心残りである。とはいえ、南北朝期に限らず、ユーラシア大陸の幅広い染織品や染織文化に関わる品を実見することができた。すでに図版として発表されている出土染織品に加え、未発表の収集品も実見し記録した。

① 本年度の研究旅行の旅程及び主な関連見学先

・2019年3月～2020年1月

北京（中国国家博物館、故宮博物院、北京首都博物館、北京服飾学院博物館、北京大学考古博物館、清華大学美術館）

・2019年6月末 浙江省杭州（中国絲綢博物館）、寧波（寧波博物館）

・2019年7月中旬～8月初旬

河南省洛陽（龍門石窟、洛陽博物館）、陝西省西安（法門寺、陝西省歴史博物館、西安博物館）、四川省成都（蜀錦織繡博物館、四川省博物館、成都市博物館、金沙遺址博物館、三星堆遺址博物館）、湖南省長沙（馬王堆漢墓、湖南省博物館）、江蘇省南京（南京博物院、南京雲錦博物館）、蘇州（蘇州絲綢博物館）、浙江省杭州（中国絲綢博物館）、雲南省昆明（雲南省博物館）、大理（大理市博物館、白族刺繡店）、麗江

・2019年9月下旬

大韓民国扶余（定林寺址、国立扶余博物館）、ソウル（国立中央博物館、国立民俗博物館）

・2020年1月初旬～末日

台湾台北（国立故宮博物院、順益台湾原住民博物館）、新疆ウイグル自治区トゥルファン（吐魯番博物館、アスターナ古墓群、高昌故城、吐峪溝、ベゼクリク千仏洞、布市場）、ウルムチ（新疆ウイグル自治区博物館）、甘肅省蘭州（甘肅省博物館（臨時閉館につき見学できず））、上海（上海博物館（同右））

② 研究発表、論文

・9月26日～29日 『工芸史研究のための日韓学生学術会議』（韓国伝統文化大学校）にて発表。

・11月 同会議の論文集に寄稿（「蜀江錦《赤地亀甲繫花葉文錦》にみる東部ユーラシアの文化交流」）

・12月 『第7回 茶境』（清華大学・北京理工大学）に出席。

・1月 同会議の論文集に寄稿（《由蜀江锦“赤地龟甲系花叶文锦”探究东部欧亚文化交流》）（中国語）

③ 全般的な留学成果

・研究旅行を通じて、未だ図録として発表されていない染織資料の写真を撮影、記録観察することができた。また、中国各地の染織品の産地を訪問、実際に使用された織機や織成の様子を観察し、織技術と染織文化についての理解を体系的に深めた。

・清華大学にて美術考古学に関する講義を受けた。特に尚剛教授（中国工芸美術史史料学、中国工芸美術断代史）、李静傑教授（美術考古、中古時期中国及び周辺地区文化芸術交流）の講義を通し、古典文献と美術考古学を接続する中国の研究手法に触れた。

・同じく東アジアの工芸や染織を学ぶ中国韓国の学生及び研究者と、各シンポジウムや授業を通じて交流し、友好を深めた。

・生活面、研究面における中国語能力が全般的に向上した。また、染織史研究において、日中間でかなりの専門用語の相違があることを改めて実感し、帰国後は用語の整理にも励む必要があると感じた。

・日本で閲覧できない図版資料を収集、記録を得た。

留学中の生活・研究でのトピックス

・留学は1年という短いものであったが、本当に多くの人々に折に触れ助けをいただいた。この一年間、清華大学の寮に住みながら、授業と図書館を往復しつつ実見のために出掛ける、というような生活を送っていた。北京では実名制の携帯上のサービス（キャッシュレス決済、交通機関、出前、地図…等）で生活がほぼ完結するため、最初は学内の自動販売機で飲み物も買えず、安全検査やネット環境、現代美術の動向にも、正直にいえばうろたえた。しかし、研究室の張夫也先生と先輩方が快く迎えてくれ、折々に出掛けたり、ご飯を食べながら中国の生活や言語について教えて頂いたり、貴重な時間を得た。居場所ができたお陰で、その後自身の研究にも集中することができた。また、北京服装学院の学生たちとも知己を得、古代服飾のシンポジウムなどに参加するなどして交流を深めた。成都では四川大学の芳佳楠先生にお世話になり、多くの見学先を訪れることができた。留学を通して出会った人々には、いくら感謝してもしきれない。



・今年は建国70周年に加え、COVID-19の発生など中国にとっては良きに悪きに話題の多い年だった。昨今の「一帯一路」政策の反映か、中国国内では盛んに「絲綢之路（シルクロード）」や古代中国の文化交流をテーマとした展示が行われており、報告者にとっては好機であった。その中で、現在の中国では「蜀錦」は、絲綢之路沿線の地域に対する中国（漢文化）の影響を代表し、ナショナリズム（又は四川地域のローカリズム）及び「中華民族」概念に寄与するものとして扱われているようだった。改めて、対象物と対象にまつわるイメージの関係について注意しながら研究する必要を感じた。



・研究旅行中、一つの村に立ち寄った。トゥルファン近郊の吐峪溝という地区で、唐代の千仏洞を見にきたのだが生憎積雪で入れなかった。村をふらふらと歩いていたところ、ウイグル族のお婆さんに手招きされ、彼女の家でもてなしを受けることになった。薪ストーブの近くで、茶、ナン、干葡萄などを頂いた。ウイグル語がわからず最初は当惑していたが、印象的だったのは家族の誰もが我々がいることに驚かず、とても自然に歓待してくれたことである。（のちに子供が中国語を話せることがわかり、交流できた）ざらざらとした土壁で作られた室内には、アトラスというウイグルの色鮮やかな絹緋や絨毯が至る所に用いられており、鮮烈な対比でうつくしかった。染織品の性質上、伝来地域での受容を考えていくことが多いが、染織文化はやはりその生産地域を離れては考えられないことを実感する体験だった。

今後の社会貢献

- ・ 報告者はまず、中国の研究動向と自身の観察結果をもとに修士論文の完成をめざす。留学を通し、東アジアの工芸品を研究するという事について改めて考えた。工芸品の場合、使用される地理範囲は一般に広がるが、同時に現代では、民族集団や国家のアイデンティティを代表するものとしてもみなされる。また、受容された先の地域でもまた其々に意味が付与される。「蜀錦」は中国（西域諸国・青海地方を含む）や日本で其々に所蔵、受容されている。いずれは博物館等で工芸品の保存や展示に関わりたいと考えているが、対象物の各地域でのあり方に目を向けることは、今後も応用できる見方と考える。また、各地の博物館の展示方式を観察した経験を活かし、教育普及についても応用したいと考えている。
- ・ 日中間で類似の研究はあるが、いまだ相互の参照は比較的薄いと言わざるを得ない。この留学を通して培った友好関係や中国語能力を活かし、今後、中国と日本の研究者をつなぐ手伝いができればと考えている。また、染織品にまつわる専門用語や定義の整理を改めて中国語と対照させて進めていく。